

ERPで何が変わったのか？

ERP (Enterprise Resource Planning : 統合業務パッケージソフト) が本格的に日本で普及したのは90年代の中頃のことでしたが、最も先進的な企業では80年代末には既に実質的なERPの導入に着手していました。ただし日本企業の場合は国内向けではなく、海外の現地法人が最初です。そうした先進企業が基幹業務にパッケージソフトの導入を進めた結果、それがどうも上手く動かないということに気づき出したのが93~94年ぐらいです。

その頃になってようやく世間でERPが騒がれ始めました。それまでのソフトウェアは経理、製造、物流など機能別に種類が分かれていて、お互いの接続、情報交換が容易ではありませんでした。これに対してERPは「オール・イン・ワン」一本のソフトで全ての基幹業務をカバーする。つまりERPは何でもできる、というのがうたい文句でした。

もっとも、実情を知っている先進企業は当時、かなり冷めた目でそうしたERPベンダーのプロモーション活動を眺めていたようです。それだけ先進企業と一般企業にはタイムラグがあったのです。

実際、90年代の後半になると、ERPと呼ばれるパッケージソフトにも、それぞれ得意分野があることがハッキリしてきました。そのためオール・イン・ワンのパッケージとしてではなく、得意分野だけが利用される形にERPの性格が変わっていきました。こうして当初のコンセプトは崩れてしまったけれど、パッケージの普及自体は進んでいきました。

その結果、何が起こったのか。まずユーザー側に業務パッケージソフトに対する抵抗感がなくなりました。“自社開発よりパッケージ”という流れが出てきたわけです。その影響は物流ITにも及びました。物流分野でも80年代の初頭から、特定のオペレーション・システム(OS)の上だけで動く在庫管理や運輸管理の小さなソフトは販売されていました。数十万円という値段のソフトです。

これに対してERPが普及した後は、より大規模な物流ソフトがパッケージとして提供されるようになっていきました。その代表がWMS (Warehouse

Management System) と TMS (Transport Management System) です。ここで言う大きい、小さいとは、値段だけのことではなく、従来のパッケージが台帳レベルの身近なものだったのに対し、今日のWMSが「製・販・物の統合」といった新しいコンセプトに基づいているというほどの意味です。そんな「大きい」ソフトウェアを、自社開発するのではなくパッケージとして導入しようというニーズが、ユーザー側に生まれました。

同時にERPの普及は、ERPに対応した実行系ソフトウェアのニーズを産みました。もともと全てカバーするというのがERPの売り文句だったわけですから、そこには物流向けの機能もメニューとしては用意されています。しかし最近の統計を見ると、ERP

を導入した企業の8割は物流分野については別の専用システムを利用しています。

接続の手間からレガシーの利用を断念
物流パッケージへの切り替えが進む

日本に限れば、さらにその割合は高くなります。

ただし日本の場合、パッケージではなく自社開発した物流システムが主流です。そのためERPを導入するに当たって、レガシーの物流システムとERPとの接続に大変な手間とコストが発生しています。それによって物流システムの機能が強化されるわけではないので、もったいない投資と言えます。

これに対して今日のWMSパッケージはもともと標準化されたインターフェースを採用しているためERPとの接続が容易です。インターフェースにかかるコストを、機能の強化に回すことができるわけです。そのためERPを導入した企業の多くが結果として、レガシーの物流システムを捨て、WMSやTMSなどのパッケージを導入するという流れになっています。

フレームワークス
田中純夫 社長

たなか・すみお 物流企業系システムハウスを経て、91年に独立。エクゼを設立し、社長に就任。製造・販売・物流を統合するサプライチェーンシステムのソリューションプロバイダーとして活動。2001年10月に「フレームワークス」に社名変更

